

2012 年度図書館実習学生報告

青木 孝介（文学科文芸・思想専修4年）
（実習館：埼玉県立浦和図書館）

1. はじめに

図書館実習を終えてしばらくしてからの図書館実習事後指導の際、驚くべきことを耳にした。「浦和図書館の閉鎖」についてである。

熊谷に新館設置，非耐震3館を集約

3図書館の統廃合は，県が2015年度までにすべての県施設を耐震化させる動きの中で検討された。県教育局生涯学習文化財課によると，3図書館は築約30～50年で，いずれも耐震基準を満たしていない。すべてで耐震化を行うと工事費用が膨らむが，図書館新設でかなり抑えられるという。3館の資料を集約することで，利用者の利便性を向上させる狙いもある。

そのため，熊谷市に建設する中小企業の支援機能などを備えた県と市との複合施設『北部地域振興交流拠点施設（仮称）』に新図書館建設を計画。新図書館では，経営分野の専門書を積極的に収集して県内企業の支援にも力を入れるなど，さらに機能を高める方針だ¹⁾。

実習期間は2週間足らずであったが，それでも縁有る場所が無くなってしまいかもしれない事は悲しく，また釈然としないというのが正直なところである。もちろん，現行の体制が決して完全ではなく，課題も多いということは承知している。その上で，図書館とは一体何であるのか，というもっとも基本的な問題へと立ち戻る必要があるのではないか。

今回は，私の実習の振り返りを通して，浦和図書館が果たしていた役割について，一度考え直してみようと思う。わずかな時間であるが，そこで私が見，学んだことを通して，図書館，そしてそこで働く人々の姿をイメージし，考えていただければ幸いである。

2. 浦和図書館について

埼玉県立図書館は2012年現在，浦和，熊谷，久喜の3館による，分野分担収集体制を取っており，それぞれ「社会科学，産業，地域・行政資料」，「総記，哲学，歴史，海外資料」，「自然科学，技術，芸術，言語，文学，児童書」に特化して収集，保存，提供を行っている。浦和図書館では，この他に資料管理担当として，各館の資料受け入れ業務を一括して行っている。

館の構造として，主として1階部分に児童図書室，2階部分が視聴覚資料と新聞記事，3階部分が図書・雑誌資料の一般開架，閲覧室となっている。3階では，インターネットに接続できるパソコン端末のほか，後述のビジネス支援サービスに利用できる，各種オンラインデータベースアクセス用の端末が設置されている。この他，定期的に開催される映画会の為の映写室や，対面朗読室なども備わっている。

職員数は全体で43名，そのうち，主として内部で図書資料管理に携わる「資料管理担当」の方々が13名，カウンター業務や書庫出納等，図書館の外的な業務一般に携わる「参考調

査担当」の方々が17名である(2012年6月1日現在)。

所蔵資料は図書資料が総計490,089冊。新聞雑誌等の資料について、新聞が160タイトル、雑誌が1,668タイトル、マイクロフィルム資料が6,464リール。電子媒体資料が444点。視聴覚資料として、ビデオテープが2,646タイトル、ビデオディスクが44タイトル、CDが5,223タイトル、DVDが457タイトル。障害者資料として、点字資料が3,081タイトル、録音資料(テープ)が1タイトルである(2012年4月1日現在)。

これらの資料は、開架で提供されている資料の他、図書館内の地下一階から3階までの書庫と、図書館に隣接する旧文書館書庫にて保管されており、これら書庫内の資料は職員によって出納される。「県立」図書館という性格上、浦和図書館の機能は、主にこの書庫における保存といえる。また、図書館間相互貸借業務として、各県立図書館には「連絡車」、県内市町村立図書館には「協力車」が巡回している。

この他に浦和図書館に特徴的であるのは、古地図から『のぼうの城』まで、埼玉県に関わりのある様々な資料を収集した、「埼玉資料室」の存在や、様々なオンラインデータベースや、専用の書棚に排架されているビジネス関連の資料を用いた、「ビジネス支援サービス」に力を入れている点である。

利用者層は多様である。子どもからお年寄りまで、様々な人々が利用している。ただし、傾向としては、大人の利用が目立っていたように思う。「県立」図書館は、各市町村立図書館の後方支援が主であると思われるかもしれないが、実習期間での印象を言えば、地域に根差した図書館としての役割が、確かに存在しているように見えるのである。

3. 実習内容

今回の実習では私の他に、筑波大学情報学群、知識情報・図書館学類の学生2人が参加しており、彼らと共同で様々な業務に携わることになった。図書館について学んでいる外部の人々との交流は私にとって始めてであったので、とても新鮮であったのと同時に、図書館業務について、私なぞよりもはるかに深い知見を持っている彼らからは、様々な刺激を受けた。

実習は大きく分けて、各部門の担当者の方による概要説明と、実際の図書館業務実習の二パターンであった。一口に「図書館」といっても、その中では様々な部門があり、それぞれがそれぞれの役割を果たしている。「図書館」とは、それらの総体である。今回の実習に協力していただいた部門を列挙してゆくと、「企画担当」、「社会科学資料担当」、「産業資料担当」、「システム担当」、「地域・行政資料担当」、「資料収集担当」、「資料整理担当」となる。

私たちの実習は、まずは広大な書庫の位置関係を把握するところから始まった。来館者からの資料請求を受けての書庫出納はもちろんのこと、他館との相互貸借業務(浦和図書館では「協力業務」と呼称)に回す資料を、書庫内を駆けずり回って集めたことをよく覚えている。「協力業務」においては、浦和図書館始め、各県立、市町村立図書館の資料が県内のあちこちを駆け巡っている様子を確認することができた。

映画会やおはなし会の補助では、浦和図書館が地域のコミュニティの一部として機能していることを実感した。また、例えば上映されている映画のフィルムは県立図書館の所蔵資料であり、図書館の所蔵している資料を、如何にしてアピールするかについて考えさせられることでもあった。

この点に関しては、浦和図書館では、職員がテーマを決めていくつかの資料を展示することを行っており、今回われわれ実習生にその任が与えられた。筑波大の2人の発案から、

われわれは「障害について考える」というテーマで、開架、書庫を問わず、様々な資料を展示した。

カウンター業務については、われわれは半日担当しただけであったが、それでも、カウンターには、たびたび利用者が訪れ、貸出返却業務に追われた。また、資料を他館から取り寄せて利用する人の多さも目に付いた。このように気軽に他館の資料を取り寄せられることは図書館利用にとって重要なことである。

資料管理業務実習において、図書館内部の資料管理システムのデータ操作を行ったが、一冊の資料について、様々な情報をチェックし、細かく入力しなければならない。そのように緻密に管理されて初めて、相互貸借は成り立つものであることを実感した。

また、実際的问题として、図書館に行政から配分される「予算」についてのお話も伺った。各都道府県で図書購入費にはかなりのばらつきがある。決して潤沢な資金があるわけではない中、図書館サービスということについて、どのような対策を講じてゆけば良いのか、考えなくてはならないことを痛感した。

4. おわりに

今回の実習は、浦和図書館の職員の方々の丁寧なご指導や、共に学んだ筑波大の二人のおかげを以て、大変実り豊かなものであったように思う。普段目にしにくい「裏側」を垣間見、われわれの普段利用する図書一冊に至るまで様々な人の手を介して届けられていることを、肌で感じることができた。

昨今、図書館を取り巻く状況は、決して楽観視できるものではない。しかし、全国的に見て、図書館利用の傾向は高まってきており、2010年度の全国の図書館で貸し出された本の冊数は、6億6360万冊で。過去最高であったという²⁾。

現代において、「図書館」とは何であるのか、否、あり得るのか。そのことをもう一度問わねばならないのだろう。

¹⁾ 『読売新聞』2012年10月10日付

²⁾ 『朝日新聞』2012年11月1日付

飯酒盃 美穂（文学部文学科日本文学専修4年）
（実習館：東京子ども図書館）

1. はじめに

私は私立の専門図書館である東京子ども図書館で2012年10月3日、10月10日～13日、16日～20日の10日間にわたり実習をさせていただきました。私がこの図書館を希望した理由は司書課程の児童サービス論に興味をもっていたからです。子どものための専門図書館というと絵本がたくさんあって…というイメージがありますが、この図書館ではそれにとどまらず多くの取り組みが行われており、他の図書館とは違うところがたくさんありました。その中でも特に印象に残ったものを紹介していきます。

2. 図書館概要

東京子ども図書館は4つの家庭文庫が統合して生まれ、1974年に財団法人の専門の私立図書館となりました。公益法人の許可を受けたのは2010年と最近のことです。館内の施設は、3歳から高校生までが利用できる児童室と、児童書関連の専門資料を揃えている資料室、プログラムを行う際に使用するホール、読み聞かせを行う際に使うお話の部屋があります。また図書館の分館としてかつら文庫があります。児童室・資料室共に開館は火・水・金・土曜日です。かつら文庫は第1～4土曜日のみ開館しています。

職員構成は、図書館職員のほかに、図書館の出版物を作る編集担当の方や、ボランティアの方も多くいらっしゃいます。蔵書は、児童室には絵本をはじめフィクション、ノンフィクション、伝記など約7,500冊が年令も配慮しながら配架されています。資料室には洋書の絵本や児童書関連の書誌・雑誌、児童文学賞を受賞した作品など約17,500冊があります。また児童室はカード目録を、資料室の資料も最近入った本以外はすべてカード目録を使用しています。その理由として図書館自体がそこまで大きくないことと、職員の方が配架場所や書架の情報を記憶していることがあげられます。

3. 実習内容

① 児童室

実習のメインは児童室で子どもと一緒に本を読むことでした。ひとりひとりの子どもと真摯に向き合っている職員の方々を見ると、学ぶことがたくさんありました。はじめは慣れませんでした。次第に一緒になぞなぞをしたり、本を読んだりすることができました。また子どもとの距離のとり方が非常に難しく、職員の方に教えていただいた、「仲良くなるのではなく、子どもから尊敬される図書館員になる」という言葉を意識していました。

② 本の会

毎週木曜日に開かれる児童室にいれる本の選書会議です。木曜日は図書館が休館日なので1日かけ、編集の方やボランティアの方も含めて行われます。本の会に持ち寄られた新刊に担当を割りふって本を評価するのですが、1人の意見だけで本を入れることはほとんどありません。何週間もかけて、職員の意見・評価を総合して選書を行っています。児童室の限られたスペースのなかで、本当に子どもに読んでほしい本を選定するため、本の会を通過する本はほんのわずかです。私も1週目は1冊、2週目は4冊担当させていただきましたが、本の評価を決める責任を感じると同時に、さまざまな意見を聞く中で本の知識が増え、作品の見方も学ぶことができて視野が広がりました。

③ おはなしの時間・大人のためのプログラム

東京子ども図書館には読み聞かせ・お話のための専用の部屋があります。水・土曜日に開かれるおはなしの時間は子どもたちだけの空間で、親御さんは一緒に部屋に入ることはできません。ろうそくに灯がともると静かに話をきく合図です。私も一度『ぐるんぱのようちえん』を読ませていただきました。また大人向けにも大人のお話会をはじめ、子どもの図書館講座という公共図書館の方や学校図書館、文庫の運営をされている方などを対象とした専門的なプログラムもあります。

④ 「こどもとしゃかん」発送準備

東京子ども図書館では出版物も作っています。季刊で出される機関誌『こどもとしゃかん』をはじめ、ブックリストや語り手のためのお話集などがあります。この出版物には図書館の活動を知ってもらう意味と、図書館の運営資金をあつめるという重要な役割があります。発送にまつわるほとんどの作業も図書館内で行っており、印刷したり紙を折ったりという一見単調な作業ですが、この取り組みが図書館運営を支える大事な役割を果たしています。

4. まとめ

東京子ども図書館はここには書ききれないほど多くの取り組みを行っています。実習を振り返ると本当にたくさんの経験をさせていただくことができました。実習のなかで強く感じたのは、東京子ども図書館が児童サービスに関わる方のリーダー的存在として機能しており、多くのプログラムを通して子どもと本をつなぐ役割を図書館の外までも伝えていっているということで、図書館全体で強い意志を持って前進していく姿は力強いものがありました。職員の方はもちろん、賛助会員の方やボランティアの方、子どもたちなど、この図書館が本当に好きな方たちが協力して図書館を盛り上げていることがとても素敵でした。

実習の際はなんでも積極的に行うことが重要です。図書館職員の一員になった気持ちでやる気を伝え、認めてもらうことが信頼につながると思います。またこの図書館では特に柔軟性が必要だと感じました。子どもと接する機会はたしかに多いですが、そればかりではなく、事務作業や大人向けのプログラムも非常に多いので、それぞれ丁寧にできる方がこの図書館に向いていると思います。実習は緊張しますし大変なこともたくさんありましたが、その分新しく気づいたことがたくさんあり、とても楽しかったです。これから実習に行く方も、頑張ってください。

酒井 香織（文学部文学科日本文学専修3年）

（実習館：長野県上田市立上田図書館）

1. はじめに

わたしは9月7日から21日まで、長野県にある上田市立上田図書館で実習をさせていただきました。実習館を決定する際「受入実績館リスト」を活用する方法と、自らが特に実習を希望する図書館に直接連絡を取る二つの方法があり、わたしは後者を選択しました。その理由としては「実習館を自分で選べるならば、どうしても上田図書館で実習をしたい」という思いが強くあったからです。わたしは上田市の出身で幼い頃から（実習中に判明したことなのですが、わたしの貸出カードは三歳の時に作られたものでした）ずっと上田図書館にお世話になってきました。本を読む楽しさを教えてくれたこの図書館で実習ができると決まった時は本当に嬉しかったです。

「受入実績館リスト」に掲載されていない図書館で実習を希望する際には自ら電話で希望する図書館に実習をしたい旨を伝えます。電話口ではとても緊張してしまいましたが、実際に事前打ち合わせのため上田図書館へ赴き、実習担当の方とお話しするところには「上田図書館で実習をすることができる」という喜びで胸がいっぱいでした。以下、少しではありますが実習内容について報告したいと思います。

2. 実習内容

主にカウンター内での図書の貸出・返却作業、新刊受入れの補助、移動図書館乗務、ブッカードかけ体験などを行いました。特に印象に残っているのは移動図書館での実習内容です。何年も前からずっと親しんできた図書館であるのに、実はこうして実習を行うまで実際の移動図書館というものを見たことがありませんでした。上田図書館はわたしが通っていた小学校の真横に位置しているので、これまで移動図書館を利用する機会がなかったのです。恵まれた読書環境にあったことを改めて感じました。

移動図書館には限られたスペースの中で多くの選り抜かれた図書が並んでおり、担当の方のお話では「移動図書館（やまびこ号という名前がついています）に乘せる図書は上田図書館の蔵書とは別に管理されているので、新刊ならばやまびこ号の方が借りやすい」ということでした。やまびこ号には三回ほど乗せていただき、市内のあちこちを図書館員の方とまわりましたが、様々な理由（主に距離の問題）で上田図書館を訪れることができない市民の方にとっても役立っているということをひしひしと感じました。やまびこ号が来るのを今か今かと待っていて下さった利用者の方の姿を見ると嬉しくて、「たくさん借りていてくださいね」と声をかけながら業務にあたったことを覚えています。

次に印象的だったのは新刊受入れの補助での経験です。新刊受入れでは主に受入印と受入れ日付印を捺す作業をしました。一見単調な仕事内容に見えるかもしれませんが、これから先何十年も上田図書館の蔵書として多くの方に読まれる図書だと考えると、その受入印を捺すという仕事は責任重大です。一冊一冊丁寧に捺していると翌日腕が筋肉痛になるほどの重労働でしたが、非常に貴重な体験をさせていただいたと思っております。

二週間の実習の中で一番長い時間行っていたのは、やはり図書の貸出・返却作業です。書店でアルバイトをしていた経験があるので図書のバーコードを読む作業は比較的慣れていたと言えるのですが、苦戦したのは返却された図書を書架に配架することでした。事前にどの分類の図書がどの場所に配架されているのかということは教えていただいていたのですが、短時間で全てを把握することは難しく、毎日の配架作業を通して少しずつ覚えていく形になりました。始めは利用者の方に図書の場所を訊かれても答えるのに時間がかかっていましたが、一週間もするとすぐに書架から図書を見つけることができるようになり、自分でも「探す時間が短くなっているなぁ」と成長が感じられました。利用者の方に「ありがとうございます」と言っていただくととても嬉しかったのを思い出します。

3. 感想・考察

本を読むことが大好きで大学でも日本文学を専攻しているわたしにとって、本を読む楽しさを教えてくれた原点である上田図書館で実習ができる、というのはこの上ない喜びでした。突然の実習申し込みの電話にも快く対応して下さり、実習中も業務の一つ一つを大変丁寧に教えていただいた上田図書館の図書館員の方々には本当に感謝の言葉が尽きません。

こうして文章にしてしまうと単調かもしれませんが、実習期間の二週間はとても濃密です。毎日が発見の連続で、学ぶべきことが本当に数え切れないほどありました。こうして実習を振り返ると達成感で胸がいっぱいです。上田図書館の皆様、講座事務室の方々、司書課程の先生方には本当にお世話になりました。特に永田治樹先生には遠いところ長野まで足を運んでいただき、感謝の念が尽きません。

図書館実習に関わってくださった全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。

藤原 佐和子（文学部教育学科初等教育課程専攻4年）

（実習館：慶応義塾幼稚舎図書室）

1. はじめに

私は慶応義塾幼稚舎図書室で、9月1日から9月20日までの12日間、実習をさせていただきました。慶応義塾幼稚舎図書室の利用者は小学生と、教員の方で構成されています。そのため、児童図書と教材管理が業務の中心に実習はさせていただきました。実習は慶応義塾大学文学部の図書館・情報学専攻の学生の方と二人で行ないました。

2. 図書館利用状況

慶応義塾幼稚舎図書室は、慶応義塾の幼稚舎（小学校）の中にある図書室です。1・2年生は国語の授業の中で、毎週図書室に訪れ、本を借りていきます。その際、司書教諭から本の読み聞かせが行なわれるため、児童は自然と本に親しんでいきます。3年生以降は、授業時間内で行くことはほとんどありませんが、児童は積極的に利用していました。また本の貸し出しだけでなく、図書室にあるクイズ問題を解きに、多くの児童が図書室を訪れます。クイズの問題は問題で指定されている百科事典で調べると、解答に辿りつくようになっています。正答数の多い児童は、図書館内の掲示板に名前が記載されるため、児童は皆一生懸命クイズに答えていました。

3. 特徴

慶応義塾幼稚舎図書室の特徴の一つとして、図書室職員によって本の返却処理をしてもらった後、児童が自分で、借りた分類記号をみて本棚に返しに行くことがあげられると思います。分類記号のことを、慶応義塾幼稚舎図書室では、「本の住所」と呼んでいます。この実践は分類記号を児童に身につけさせたいという意図のもと、実施されています。しかし、その分児童の返却ミスにより、本が正しく返却されないことも多くあります。そのため職員による書架整理には時間がかかります。このように多少の手間もかかりますが、この活動は分類記号を身につけさせるという教育目標のもと実施されており、学校教育という場に位置づいた図書館ならではの活動であると感じました。

また、慶応義塾幼稚舎図書室では児童が本を読んで感じたことを絵と文章で書ける独自の読書記録ノートを作っています。読書記録ノートは、図書室に出すと司書教諭の先生からコメントをもらうことが出来るため、先生との交流を楽しみに、丁寧にたくさん書き込んでいる児童が多かったことが印象的でした。

4. 実習内容

図書館実習期間の最初の1週間は、児童の新学期がまだ始まっていなかったため、利用者はいませんでした。そのため、この期間は本の修理や、図書館内の掲示物の作成にあたりました。私は、実習期間がパラリンピックの開催期間と被っていた為、新聞を使用しパラリンピックについての掲示をおこないました。また、慶応義塾大学の学生の方は、探偵もののおすすめの本の掲示を行っていました。

またこの時期に、貸出のパソコンシステムの操作方法や、予約の受け付け方についても実習させていただきました。貸し出した本の記録は、1年生から6年生まで大切に保管さ

れ、卒業の際に今までの読書記録として図書館からプレゼントされます。そのため、貸し出しや返却記録は間違いのないよう注意が必要でした。

2週目からは利用者のいる実習を行ないました。慶応義塾幼稚舎図書室の利用者の多くは小学生が対象となるため、本の貸し借りだけでなく、児童とのコミュニケーションの大切さも学びました。児童の中には、読んでみたい本のタイトルではなく、「パステルカラーの綺麗な絵本が読みたい。」という児童もいました。その際、職員の方は「この本は？この本はどう？」といった様々な本を児童に提示されていました。このように児童図書館は、内容もちろんですが、どのような絵の展開であったか、ということも覚えていなければレファレンスサービスは出来ないということを感じることができました。

3週目は1・2年生の授業の中で、読み聞かせを行なわせていただきました。『もりのかくれんぼう』と『どうして、ぞうのはなはながいの？』の二冊を私は読み聞かせをさせていただきました。児童は読み聞かせの間、熱心にお話しに入り込んでくれていました。その姿に励まされ、読み聞かせを行なうことが出来ました。

5. 感想・考察

今まで司書課程で学習してきたことの総括として、今回の実習に臨ませていただきました。しかし、机の上で学習したことがあるということと、実習の中で実際に実践してみることとは異なり、状況に応じたレファレンスサービスが求められることを感じました。

また児童との関わりをもち、訪れたくなる図書室の空気を築くことも大切なことだと感じました。実際、慶応義塾幼稚舎図書室の方々は、私も含め実習生にもとても親切にして下さる素敵な方ばかりでした。本やレファレンスサービスを充実させることはもちろんですが、訪れたくなる図書館づくりがとても大切だと、今回の実習をとおして感じました。

柳原 広未（文学部史学科3年）

（実習館：東京都立図書館）

1. はじめに

私は東京都立図書館で7月30日から8月10日までの土日を含まない10日間、実習させていただきました。なお、東京都立図書館には中央図書館と多摩図書館があり、8・9日の2日間は多摩図書館での実習となりました。館外への貸し出しを行わない特殊な図書館でもあり、とても緊張して臨みましたが、職員の方々はどのような質問にも答えて下さり、他大学の実習生と協力しつつ充実した時間を過ごすことができました。

2. 図書館概要

都立図書館は1908年、日比谷図書館が開館したことに端を発します。更に1973年に都立中央図書館が開館し、八王子・立川・青梅にあった三館を多摩図書館として併合し、1987年から中央図書館は23区、多摩図書館は多摩地域と地域で分担した運営が行われました。

2002年に中央・日比谷・多摩図書館を組織統合して都立図書館として一体化運営が図られました。今のように多摩図書館で児童・青少年サービスを行う機能分担がなされるよう

になったのはこの時からです。2008年に都市東京資料の集中化の方針に基づき、多摩地域の資料を都立中央図書館に移管します。2009年、都立中央図書館・多摩図書館がリニューアルオープンになりました。

所蔵資料数は中央図書館が図書約180万冊、新聞・雑誌が約8,000タイトル、多摩図書館は児童・青少年図書が約182,000冊、雑誌が約16,900タイトル、新聞が約170紙となっています。なお、中央図書館には特別文庫室や音声・映像資料室、視聴覚障害者サービス室があり、1階にはNDC分類ではなく設定したテーマごとに分けた資料も配置してあります。

3. 実習内容

企画経営課・情報サービス課・資料管理課という課ごとに日程が組まれ、午前中にその課や業務についての概要説明があり、午後実践するというものでした。初日と最終日は企画経営課の方による実習で、初日はオリエンテーションと館内を見た上で気付いたことを実習生全員で意見を出し合ってまとめるという作業でした。

情報サービス課での実習は重点的情報サービス（テーマごとに分ける資料配置）や電話センター実習、カウンター研修、開館時利用者出迎え、新聞綴じ、雑誌の排架、出納業務、資料整理、各自で自由にテーマを決めてそれを調べるレファレンスのようなものがありました。資料管理課の実習は、和書の選定、和書・雑誌・年鑑の収集やデータ作成、海外資料のデータ作成がありました。和書は選定するといっても私達実習生が選んで図書館に入れてもらうというのではなく、あらかじめ図書館の方々が選定会議を終えたものについて自分で判断して購入するかどうか考えるというものでした。

多摩図書館では8月8日と8月9日の2日間実習をさせていただき、1日目は多摩図書館の概要説明と児童青少年サービスについて、2日目は新着雑誌処理や書庫出納、出納カウンター実習と東京マガジンバンクについてでした。児童青少年サービスについては「羅針盤」という高校生向けのブックリストの改訂にあたり、高校生に薦めたい本があるかどうか、またその作品について「羅針盤」の掲載にふさわしい本かどうかの話し合いをし、その後夏休みの小学生向けの自由研究講座にも参加させていただきました。

最終日は中央図書館に戻り、実習を終えての感想と「私なら、都立図書館をこのようにPRする!」というテーマのプレゼンを行い、実習の総まとめとして職員の方々から意見をいただきました。

4. 考察

初日のワークショップでじっくりと館内を見ることができたこと、他大学の実習生と話す機会を得たことが後々の実習に役立ちました。事前に予定を目一杯に詰めた日程だというお話は伺っていましたが、本当に充実していました。一般市民向けに定期的に図書館バックヤードツアーなどを行っていることもあってか、とても丁寧な説明を受けることができました。実習を進めるうちに課や係を連携することがとても大切なのではないかと感じました。資料の選書や収集に始まり、それをデータ化・装備し、情報サービス課へと渡し、利用者へと提供し、また利用者にどのような資料があるのか、どのようなことが図書館でできるのかを知ってもらうための企画を作るという一連の流れ。これはどれか一つが欠けてしまっただけでも利用者に支障をきたすはずです。一つ一つのことを正確にかつ迅速に作業することで利用者が気持ちよく図書館を使うことができるのだと改めて思いました。実習に行く前は直接利用者と接するレファレンスに重きを置きがちでした。しかし、いかに

使いやすいように本を排架するか、いかに分かりやすくデータを入力するかという、利用者が普段意識しないような所でも使いやすいと思ってもらうような工夫が大切だと気付きました。

二週間の中で気付くことのできなかった都立図書館の一面もあると思います。それでも職員の方にさまざまなことを教えて頂き、どのような質問にも快く答えて頂いたことに感謝したいです。授業として学んでいるだけでは分からなかった図書館を知ることができて視野が大きく広がり、この実習で図書館というものが更に身近な存在となりました。この実習で得たものをどこかで活かしていきたいです。